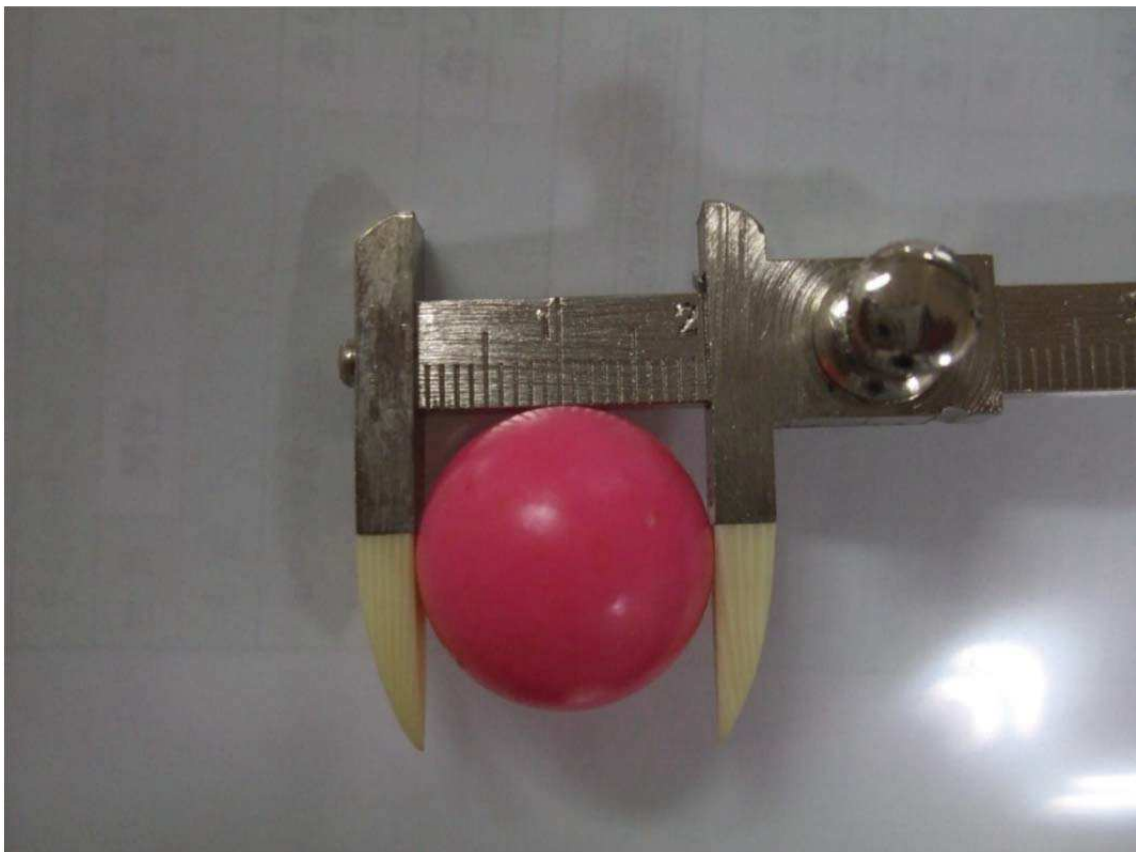


Injury Alert（傷害速報）類似事例

スーパーボールの誤飲による窒息

（No. 3, No. 11 スーパーボールの誤飲による窒息の類似事例1）

1歳8ヶ月女児。2011年5月27日午後8時頃、自宅で、家族が目を離している間に、同日昼に薬局でもらった硬質のプラスチックのボール（直径20mm 写真参照）を飲み込んで窒息した。夕食後、食卓の下で一人で遊んでいて、ボールを喉につまらせたところを兄が発見した。事故発生時、母は夕食後の片づけで台所にいて、児を直接見る事ができる場所にはいなかった。「オエッ」という声が聞こえて患児をみたところ努力呼吸をしていた。ボールがいつから床の上にあったのかは不明。母が指を入れて異物摘出を試みたが上咽頭にはまり込み摘出できず、当院に救急搬送された。人工呼吸管理を行ったが第5病日に死亡した。



直径20mmの硬質のプラスチックのボール（薬局でもらったもの）

Injury Alert (傷害速報) 類似事例

スーパーボールの誤飲による窒息 (No.3, No.11 スーパーボールの誤飲による窒息の類似事例2)

事例	年齢：1歳 9か月 性別：男 体重：10kg 身長：90cm	
傷害の種類	窒息	
原因対象物	木製の球体	
臨床診断名	異物誤嚥・窒息・心肺停止・低酸素性脳症・誤嚥性肺炎	
医療費	2,739,290円	
発生状況	発生場所	自宅居間
	周囲の人・状況	自宅で母親と一緒に遊んでいた。
	発生年月日・時刻	2013年 4月 29日 午後 5時 50分頃
	発生時の詳しい様子と経緯	自宅の居間で母親と一緒に遊んでいた。母親が目を離した隙に木製の球体を2個、誤嚥した。母親が慌てて1個は取り出したが、残りの一つは取り出せず、チアノーゼと意識障害を認めたため、救急を要請した。救急隊が到着時に自己心拍はあったが、搬送途中に心肺停止となり、救急隊が残りの1個を取り出して病院に到着した。 木製の球体(写真)は、直径が25mmのボールであった。母親によると、このボールは外国製の木製のおもちゃの部品で、友人からのプレゼントであった。箱を捨ててしまったために、製品名、メーカーはわからない。遊び方は、穴に木製のボールを入れて転がっていくおもちゃであるとのことであった。
治療経過と予後	<p>病院到着時は心静止であり、気管挿管をして心肺蘇生を継続した。挿管後の波形確認で心拍再開を確認した。最大心肺停止時間は約9分間であった。救命センターへ入室し、人工呼吸管理・低体温療法を行った。低体温療法は48時間施行し、鎮静・鎮痛剤及び、ドパミンで循環動態を維持した。低体温療法終了後、鎮静剤を中止し、3日後に抜管した。誤嚥性肺炎に対して1週間、抗菌薬を使用した。</p> <p>脳波では後頭葉に棘波を疑わせる所見があり、頭部MRI検査では拡散強調画像で後頭葉に高信号を認めた。受傷から2週間後に小児科病棟へ転棟した。嚥下訓練、リハビリを継続した。退院時には立位は可能になり、食事も以前と同様の物が食べられるようになった。視力に関しては、はっきり数値値はできないが、光覚弁から人物の区別がつく程度までは回復している。</p> <p>再診(2013年6月11日)時には、物は完全に見えており、視線も合い、追視可能となった。また、自立歩行も可能であった。</p>	



Injury Alert (傷害速報)類似事例

ガムボールの誤飲による窒息 (No.3スーパーボールの誤飲による窒息の類似事例3, No.11スーパーボールの誤飲による窒息の類似事例1)

事例	年齢：4歳5か月 性別：男児 体重：19kg 身長：102cm
傷害の種類	窒息
原因対象物	ガムボール (スーパーマーケットの小型自動販売機で購入した、直径約 25mmの硬い球形のガム, 図1)
臨床診断名	窒息、急性肺損傷(陰圧性肺水腫)、誤嚥性肺炎
医療費	500,650円
発生状況	発生年月日・時刻 2018年6月X日(火) 午後6時10分
	発生時の詳しい様子と経緯 本児は、上記時刻に母とスーパーマーケットのエレベーターに乗った後、エレベーター内でガムボール(図1)を口にいれ、飛び跳ねていた。エレベーターから降りようとした際に突然本児の動きが止まり、息苦しそうにもがき始めた。母は、本児がガムボールにより窒息したと考え、すぐに背部叩打を行なったがガムボールは排出されず、本児はそのまま意識消失した。すぐに母が周囲に助けを求め胸骨圧迫を開始した。1分後に再度背部叩打したところ、異物が排出された。本児は呼吸を再開し、意識も回復した。救急隊現着時、JCS (Japan Coma Scale) I-3、体温 37.5℃、呼吸数 32回/分、脈拍数 120/min、血圧 125/83mmHg、SpO ₂ 88%(room air)であった。医療機関へ救急搬送された。尚、すぐにかけつけた介助者のうち1人が医療関係者であり、脈の触知は確認されていたとのことであった。
治療経過と予後	病院到着時、JCS I-1、体温 36.8℃、呼吸数 28回/分、脈拍数 113/min、血圧 106/57mmHg、SpO ₂ 100%(O ₂ 6L/min)であった。顔面の溢血斑は認めなかったが、多呼吸と低酸素血症があり、両肺野に crackle を聴取した。胸部 X線写真(図2)で両側肺野にびまん性の浸潤影を認め、窒息に伴う急性肺損傷(陰圧性肺水腫)と診断した。入院翌日に撮影した胸部 CT 検査(図3)でも肺挫傷の所見は認めず、肺水腫に矛盾しない所見であった。呼吸障害の程度は軽く、High-flow nasal cannula での管理を計4日間行い、呼吸状態は安定した。誤嚥性肺炎も併発していると考えられ、抗菌薬も併用し、1週間で退院した。退院時点で特に後遺症は認めていない。



図 1. 本事例の原因となったものと同じ大きさ、形のガムボール

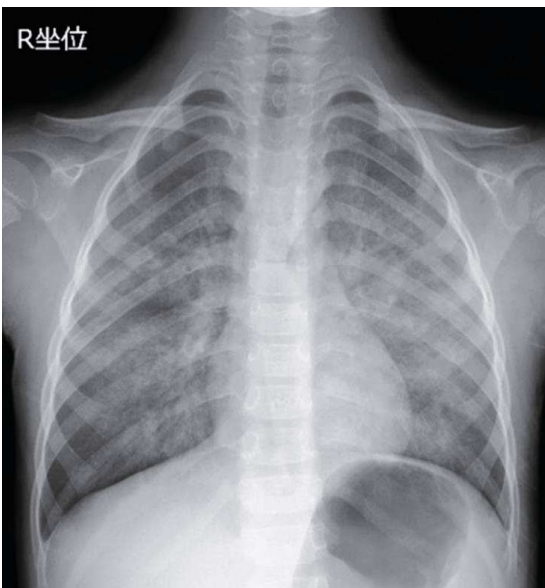


図 2. 受診時の胸部 X 線写真。両側肺野にびまん性の浸潤影を認める。

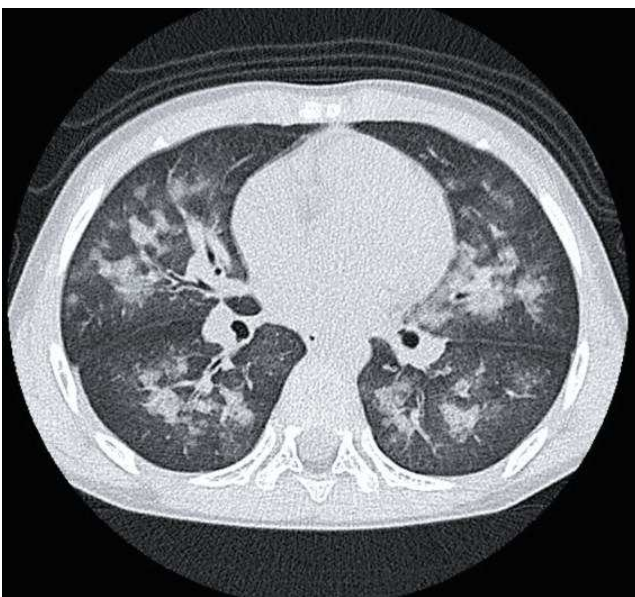


図 3. 入院 2 日目の胸部 CT 検査。両側肺野にびまん性の浸潤影を認める。